

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	社会探究コース			訪問国	カンボジア
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	石川智美	学年	1年

探究テーマ 発展途上国の教育は本当に日本と比べて遅れているのか

カンボジアに三週間、前半二週間はプノンペンにある農村部プレイボンという村でホームステイをしながら、現地の小学生に向けて英語の授業を行ったり、プライベートスクールの見学や、隣の村にあるキリスト教の教会での中国語指導を見学した。また、授業のない休日には、同じインターン生とトゥールスレン虐殺博物館に行つてカンボジアの歴史を学んだ。後半一週間は都市部であるシェムリアップに移動し、ホテル泊をしながら遺跡の見学や高校、大学の見学を行った。

これらの活動は、「発展途上国の教育は本当に日本と比べて遅れているのか」という探究テーマに対する答えを見つけるために行なったものである。

<農村部での生活>

現地の小学生に対して、単元目標や授業内容を毎日考えて2時間弱の授業を行なった。子どもたちは勉強への意欲関心が非常に高く、質問を積極的にしていた様子が印象に残った。

また、午前中の清掃活動では、姿を見かけた子どもたちが笑顔で走り寄ってくれ、言語の壁を感じさせないコミュニケーション能力に感動した。

放課後のプライベートスクールは、午前中に勤務先の学校で授業を行なった先生が自宅に生徒を招いて授業を行うスタイルで、教員たちの指導への熱も印象に残った。

加えて衝撃を受けたことは、家に集まった子どもたちが学習進度の遅い子どもたちに対して授業を行なっていたことだ。子どもたち自身が勉強に対して真に意欲と好感を持っていなければ見られることのできない状況であり、その熱意に感銘を受けた。



一方、発展途上国の教育は遅れていると言われる理由も実際に自分の目で見る事が出来た。親の仕事を手伝うために授業は基本午前中終わり。農村部の学校は奨学金が出ないため、収入の少ない両親の子どもは学校に行かずに働いていた。学校の環境や恵まれない家庭の子どもたちに対する対応はまだまだ改善できるところがあると感じた。



<都市部での生活>

シェムリアップに移動してまず驚いたことは、英語が通じるということである。シェムリアップにおいて、英語は準公用語のような存在であり、観光都市であることもあって、英語が話せなければ生活していくことはできない雰囲気があった。

都市部では、シェムリアップで一番大きいアンコール大学と、スヴァイトムハイスクールを見学した。

アンコール大学は、シェムリアップで一番大きいと言っても学部は限られており、観光都市にある大学ということもあって観光業に通ずる学部が多かった。

スヴァイトムハイスクールは、私がカンボジアで生活した中で一番衝撃を受けた場所であった。農村部で生活していたこともあり、学習進度に関して日本に劣っているものだと思っていたが、高校の授業はレベルが高く、物理や数学は私では理解が及ばないものだった。長年発展途上国に染みついた「教育が遅れている」という概念がひっくり返された衝撃を受けた。



また、都市部の学校は奨学金制度と授業のやり直し制度が整っており、経済難の子供も等しく勉学に励むことができる環境であった。授業のやり直し制度について、午前の授業を午後にやり直しすることができ、生徒を置いていかないという意気込みが見えた。

教育のレベルの高さに加えて、同じ国であっても農村部と都市部でこんなにも違いが出るものかという点でも衝撃を受けた。